

よりどころとなる場 必要だ



意見交換するリカバリー・サポート・センターと「負傷者と家族等の会」のメンバー＝川西市小花1丁目

JR脱線被害者ら

JR宝塚線（福知山線）脱線事故の被害者らでつくる「負傷者と家族等の会」は11日、地下鉄サリン事件の被害者を支援するNPO「リカバリー・サポート・センター」（RSC）のメンバーを招き、川西市内で、長期的な被害者支援のあり方について意見交換した。「周囲の記憶の風化とともに孤立感を深める人は少なくない。よりどころとなる場は必要だ」との意見で一致した。

1995年の地下鉄サリン事件ではオウム真理教信者が猛毒のサリン

地下鉄サリン被害者の支援NPOと意見交換

を東京の地下鉄車内で散布し、13人が死亡、6千人以上が負傷したとされる。2001年に発足したRSCは年1回の割合で、被害者を対象に集団検診を実施し、カルテや問診票を保存している。

RSC相談員の山城洋子さん（62）は「時間がたてばカルテを廃棄する病院も多い。被害にあった証拠が散逸することを防いでいる」と説明。理事の下村健一さん（50）は「集団検診には初めて受診する人が毎年のように訪れる」と話し、家族等の会にも参考になると提案した。JR事故の負傷者の家族からは「健康実態把握をJR西日本に求めてきたが、第三者がやった方が安心感がある」といった声があがった。

下村さんは行政による被害者支援のあり方についても「対象は千差万別であり、小回りがきく支援団体に間接支援する方が効率がいい」と指摘。JR事故で次女が負傷した三井ハルコさん（54）は「支援団体への支援を法制化したい。RSCなどと連携して意見発表していきたい」。01年に大阪教育大付属池田小で起きた連続児童殺傷事件で娘を亡くし、「立ち直り」を支援するNPO設立を申請中の本郷由美子さん（44）も同席し「今後に向けて、つながってきたい」と話した。（吉野太一郎）